

# 大学サッカー研究

A study of soccer in university

1K04B120-7

鈴木 修人

指導教員

主査 中村好男先生

副査 大榎克己先生

## 緒言

大学サッカーは、かつては日本サッカーの最前線であり、その後もピラミッドの一端を担ってきた。その後は高校以上、プロ未満に位置するピラミッドからはみ出したゆがんだ立場にあった。しかし、近年、大学サッカーの立場は育成の1ステージとして見直されてきている。

本研究では大学サッカーの概要、歴史、現状などをまとめる。それらの事実から大学サッカーが抱えている問題点を明らかにする。その結果として今後、大学サッカーが発展していくためには何が必要かという方向性を示す。

## 方法

以下の項目について資料を基にまとめる。

- (1) 大学サッカーの概要、歴史
- (2) 大学サッカーの現状
- (3) 大学サッカー独自の取り組み(早稲田大学に注目して)

以上のことから大学サッカーの抱える問題点を明らかにし、今後、大学サッカーが発展していくための方向性を提示する

## 研究の概要

第3章では大学サッカーの概要、歴史についてまとめた。大学サッカーには各地域のリーグ戦、夏の総理大臣杯全日本サッカートーナメント、冬の全日本大学サッカー選手権大会、また、試合に出られない選手のための大会として、インディペンデンスリーグの大会がある。リーグ戦として関東大学サッカーリーグ戦を取り上げた。総理大臣杯全日本サッカートーナメント、全日本大学サッカー選手権大会、インディペンデンスリーグという3つの全国大会では関東地方の大学に優勝校が多く、近年地方大学も健闘しているものの関東が最もレベルが高いことがわかった。また、すべての大会においてテレビ中継などはほとんどなく、総理大臣杯全日本サッカートーナメント、全日本大学サッカー選手権大会の決勝のみCSや深夜に放送されるのみで、両試合は観客も登録選手に動員をかけたにもかかわらず1万人弱、マスコミの扱いも小さく大学サッカーの知名度がまだまだ低いということがわかった。

第4章では大学サッカーの現状についてまとめた。練習環境としてグラウンドの状況をまとめた。関東リー

グに所属する大学では2年前は約半分の大学が土のグラウンドでトレーニングを行っていた。それに対し、2007年現在では3分の2のチームが人工芝、もしくは天然芝のグラウンドでトレーニングを行なえるようになっていた。収入という面で見ると、各大学は部費という形で大学の援助を受けている。また、そこから足りない分は部員から部費を徴収する。これに加え、企業にスポンサーになってもらっている大学も存在した。大学のサッカー部は以上のような収入をもとに大会への参加費や遠征費、用具代などを出し運営している。

第5章では早稲田大学に注目して大学サッカー独自の取り組みをまとめた。早稲田大学ではワセダクラブ・サッカースクール、Jr.リーグという取り組みを行っていた。ワセダクラブとは大学、体育会が中心となって運営された総合型地域スポーツクラブである。ア式蹴球部ではワセダクラブの活動として小学生を対象としたサッカースクールを行なっている。選手にとっては指導者の経験もできるいい場所であり、選手と地域の人が触れ合うことができる場ともなっている。また、このクラブの会費が大きな収入ともなっていることがわかった。Jr.リーグとは早稲田大学と慶應義塾大学が毎週水曜日に行なっている大会で、Jリーグにおけるサテライトのような役割を果たしていた。しかし、このJr.リーグは各大学により位置づけが異なっているため、Iリーグ以下のチームを出場させるケースや、トップチームが東京都1部リーグなど下部リーグに所属する大学もあり、早稲田大学が5,6点差で勝ってしまう試合が続いてしまっている。

## 考察

本研究では大学サッカーについてさまざまな側面からみてきた。そこでいくつかの大きな問題点が浮かんできた。それは、収入と観客の少なさ、偏った日程、サブ選手の経験の場の不足である。これらの問題点を解決するために、2つの提案をしたい。1つはワセダクラブのような活動を各大学が積極的に行なうことだ。2つ目はJr.リーグのようなサテライトリーグの整備だ。以上のように、大学サッカーが育成の1ステージとして発展していくための提案をした。大学サッカーからは今後も多くの選手がJリーグへと進んでいこう。そのルートがより大きなものとなっていくためにも大学サッカーが発展していくことを望む